**アボジとの思い出　（私にとってのメシア）**　　ワード形式

　　　　　　　　　　2016.3．1記

**１、真理のメシア**

若き時代、お父様は求道され、人生と宇宙の問題を自分の問題、人類の課題として取組まれ、聖書に秘められた神の摂理の奥義を解明されました。

　　小生は、16歳の春、死の淵から生かされ、何の為に生かされているのか求道4年、

「命には願いがある、願いの目的はこの地上には無い。生命の価値意識はその主体として絶対的主体を要求する。その主体、大生命の本体が神ではないか」と思っていた。内的求道の過程で、宇宙の法則の背後に生命、さらには慈悲の情が感じられる。神は愛なのか？　生存競争の自然界、戦争で血塗られた歴史、阿鼻叫喚の世間のどこに神の愛があるのか、反問する小生に、20歳の９月、「親の愛の一念、これが私である」と神様は愛の御手で地球を抱き、全身を神霊で満たして教えてくださった。しかし、これを証する真理が無い。生涯かけても「誰かが見出さなければ」と悲壮な決意をしていた頃である。この入神現象を体験して3か月後、原理と出会った。講義は、真に十戒の映画の場面を見ているかのような情景であった。4畳半の講義室が霊の火で燃え、黒板の文字と語る講師の言葉が光の渦となって心の板に刺さる。そのたびに心の

琴線が喜びで震えた。まさに「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」の心境であった。心霊が高まり、足が地につかず、雲の上を歩いているような天にも昇る心地であった。小生はこのあふれる喜びを抑えがたく、良心の発露から家族、親友、学友に気違いのごとく宣べ伝えた。原理を聞いた第1印象は小生がやらねばならぬと思っていたことを「すでにやり遂げた方が居た」という喜びと安堵感であった。

　1965年1月末、2１年ぶりに来日されたお父様は聖日の後、食事に各大学原理研究会委員長を呼ばれた。

その席で「なぜ、電気工学科を選ばれたのか？」「宇宙人について」「霊界のテレビについて」質問をし、「求道中窓ガラス一杯の大きな目玉が現れ、こころの奥底まで凍るような寒気がしたこと」などをご報告したことを思い起す。この50数年、ノーベル賞を受賞した学者を始め、多くの碩学とお会いしたが、原理に対する確信は揺らぐどころか益々確信が深まるばかりである。原理を解かれただけでもアボジは再臨のメシアであるという確信は変わりない。

**２、愛のメシア**

原理を聞いた当初、皆、結婚など考えもしなかった。アボジが祝福をしてあげようと1967年来日された時も「まだまだ未完成ですから」と当時の先輩達は断り、日本での最初の祝福は2年間延期された。1970年777双の祝福があった。

いつも大事な摂理の時、内的心情が整わず、天の恩寵を十分に受けることのできなかった悔い多い歩みであった。

この時も小生は勝共連合事務総局次長、WACL大会総企画室長、天勝塾塾長で多忙なこともあったが、祝福のことが気になって仕事が手につかない女性も多く、「WACL大会を成功しさえすれば天が配慮してくださる」との本部の通達であった。　大会が終わり、関釜連絡船で韓国に渡り、列車でソウルまで行った。お父様は駅まで出迎えてくださり、後にも先にもない本格的な家庭の伝統を立てる修練会が始まった。「血統転換」のみ言に心情の波長を合わせた食口は、全身の細胞が甦るような感動をもって受講していた。小生は、後々なって聖書66巻に秘められた赤い糸を引き出し、神様の摂理は血統転換の歴史であったことを解明されただけでもアボジは再臨のメシアであると痛感することになった。

　家内と一緒にお会いした時、また一人でお会いした折にも「あんたは奥さんに負けるよ！手が出るであろう！」と言われることがしばしばであった。それがいつも突然なのでどう答えたものかと返答に窮しているうちにパスすることが多かった。

　1973年暮れ、７77双の夫人達が米国摂理に動員された。3年間米国に歩んだ家内はすっかり米国が気に入り、小生を米国に来るようお父様に懇願した。「そんなこと言うなら離婚させるぞ！」とアボジに言われ、家内はしぶしぶ諦めるのだが、其の折、傍にいらっしゃった崔元福先生が「夫は針、妻は糸、どちらが無くても布は折れないのですよ！」と助け船をだしてくださった。其の折アボジからいただいたお小遣いで家内は記念にと真珠を買った。米国の遊園地で子供の土産にと、韓国のデパートでスーツを、済州島の空港でネクタイを選んでくださった。「お父さんは忙しいからお母様と一緒に行きなさい」と言われ、Mercyで服を買ってくださった。そのおり真のお母様は「尾脇さんは渉外で良く人に会うのでこれが良い」と小生なら選びそうにない、明るい多少ピンクがかたスーツを選んででくださった。「先生はみんなとの思い出を沢山作って上げているのだよ！」とおっしゃるアボジは、「このように食口を、人類を愛するのだよ！」と暗示くださっているように思われた。

　いつも「心情が最も大切なことを」教えてくださったお父様、お話を聞いているといつの間にか目に見えるかのような心情的世界に引き込まれてしまう。そしてその心情圏に酔い、時間を忘れることが多い。天国とはそのような世界だと思う。

1978年8月のことである。イギリスの教会でお父さまにお会いした。イランでの世界大学総長会議に日本の40大学の総長・学長をご案内しての帰国の途上であった。報告をするとアボジはことのほか喜ばれ、天から窓が拓けたかのように溢れるみ言葉をいただいた。

　其の折、「人間は「情」だよ！」「情は心が青いと書く。心はいつも新鮮でなければならない。刺激が無ければ、何も無いと同じ、情は刺激を受けると鏡のように静かな湖に風が吹くと波が立つように、生まれるのが願いである。

「知」という字を見なさい。口に矢と書く。口から出た言葉が的に届くように筋道を立てるのが知、どのようにすればもっと良くなるかいろいろ考えるから人類の文明は発達した。情で喜んでばかりいては発展が無い。また考えているだけでも駄目だ。

「意」という字を見なさい！思い立つというように、要するに決心して行くことだよ！人生は簡単だ！　喜びながら、よく考え、決心して行くことである」とおっしゃった。

　メシアとは何か？真理のメシア、愛のメシアを信じている信徒は多い。しかし小生はメシアの真骨頂は、王の王にあるということをアボジの聖和後しみじみと痛感する。

信仰基台と実体基台を復帰するのは何のためか？メシアと出会うためである。メシアとは何か？メシアは、きわめて自然な父母であり、創造本然の人間である。真理を探して神と出会い、神への縦的信仰を立てたアベルがカインと1つとなり堕落性を脱ぐ横的基台を立てて、サタンの不可侵権・聖域を作る。このメイアための基台群、聖域集団をまとめてこの世の神との闘い、これを自然屈服させ天国復帰の創建者、革命家がメシアである。　メイアの為の基台を蕩減復帰するのは、本来は堕落人間の為すべき責任分担であってメイアの使命ではない。しかし人類歴史の悲劇は、メシアの基台を準備したアベルがことごとくメイアに躓き、メシアが堕落人間の立場まで下りて行ってメイアの為の基台まで蕩減復帰しければならない二重の重荷を担わざるを得なかったことである。

　1963年１２月、」原理に触れ翌年４月、早稲田に原理研究会を創立し、学生運動、開拓伝道にいそしんだ小生が、国を目指し世界復帰を目指される王の王としてのメイアにお会いするには、厳しい蕩減条件があった。

　1966年3月、小生は実家の電機会社と当時山陰一と言われた書店ロゴスと鳥取教会の三位一体で山陰復帰の特別摂理があった。まだうすら寒い彼岸の朝、聖日にもかかわらず地区長が尾脇電機の本社に見えた。社長の叔父はストーブを焚いて応対した。当日は会社が休みなので店のシャッターを締め切ったままで、ストーブは焚かれたままであった。その日は、小生が秋葉原で修業し、神戸の星電社の社長らに励まされて鳥取へ帰省した日でもあった。今後のマスタープランをひろげて会長である母と叔父に説明をした後、母は実家に帰り、小生は午後４時頃、鳥取銀行の頭取に会うために、外出した。

頭取にお見せする資料が一枚足りないことに気が付き、本社に帰ってみると、机が燃えていた。小学校１年生と５年生の従弟がゴミ箱の油紙を拾ってストーブで火遊びをして机に燃え広がっていた。２人は洗面器で日を消そうとすいどうのしていた最中であった。

　　・・・・。火が２階にも燃え広がり、気が付いたときには子供たちは２階にいるという。 屋根伝いに２階に上がり窓を破ると黒煙が噴き出ってきた。「俊ちゃん！」と呼ぶと「準ちゃん！」とこえがする。あの時飛び込んで助けるべきではなかったか？小生はいまだにわからない　。その後７年間小生はサタンの霊に侵入されてなかなか抜けなかった。いろんな試練を乗り越え、サタンと分別できたのは１９７３年夏、語学研修でハワイ大へ行った折であった。３０歳の誕生日の日、小生は徹夜祈祷をハワイの砂浜でし、天の前に誓いを立てた。翌年３月、アカデミーを担当の天命を授かることになる。天との間、あるいは人間関係に一点でも隙間があればサタンに侵入される。それを抜け切ることは至難の業である。

**３、王の王としてメシア**（神の祖国復帰のメシア）

　　神様の究極的な願いは神の国復帰である、イエス様もそのために一心不乱に努力された（マタイ6：33）。アボジの願いもこの一点にあった。基督教界が反対しなければ、国連を基盤に再臨理想を実現するために若き情熱と知力を投入できてであろうに、

その大半を牢獄と迫害の中で費やされたことは、人類的損失である。60歳のご還暦の時、身をよじらせて、慟哭して未だに天の前に一国も復帰できないでいる自らを懺悔された。あの現場にいた者たちはその衝撃に襟を正さざるを得なかった。ワシントン大会の天宙的勝利により縦的蕩減条件を立てたので、地獄に陥る人類を一日でも早く救うためには、どのような横的手段を使っても天は許すだろうとおっしゃり、経済的手段を重視された。

　1976年から78年、124名で発足したPWPAも2000人を超す教授の集団となっていた。教授の世界へ奉仕するのは財政的、人材的のみならず霊的エネルギーの消耗が激しい。

　小生が霊的に落ち込んだ状況をご覧になってアボジは「人が何と言おうと弁明は必要ありません。要するに責任感と実績だよ！アボジの実績の前には神もサタンも頭を下げる。」とおっしゃった。昼の太陽のようなアボジと共に夜の月のようにアボジの周辺でお祈りをされている祈祷集団のハルモニ達にもお世話になった。そんな折、天から頂いた励ましのメッセージは、今も私の励みになっている。

　「数多くの食口がいる中で、おまえは不平をこぼさず、黙々とやってきた。学者を扱うのは簡単ではない。おまえしかいない。国を復帰するには学者がなくしてできない。おまえか倒れそうになるとき、私はどんなに泣いたことか。どうか、身体を治し、自信を持って天から勝利の冠を得るよう頑張ってもらいたい」。家内に対しては、「この嫁は口が多い。自分の気分のまま、言動すれば、今までの幸福も一日で失ってしまう。お前は男のようでいつもこの男の女々しい態度が気に入らない。しかしこの男は誰にも負けない頭を持ち、誓ったことは必ずやりとげ、責任を果たす男だ。この男は、疲れたとき、じっとお前を見ては慰めを得て、努力している。お前の男性的な良き性相を夫に上げ、夫が天からご褒美を頂くとき、お前も同参できるのだ。」　この世においては、わが教団内部においてさえ、誤解や抽象が徘徊し、時には耐えがたい試練を受けることが多いが、天があり、霊界があることが、唯一の慰めであり、希望の光である。罪は焼き滅ぼされ、真実は、いつかは輝く時が来る。全ての人々、神様と歴史的人類の“恨”が解怨される日の早からんことを祈念する｡」誰が見ていなくても「天はすべてをご存知なのだ」と視野が立体的に広がり慰められた。

　あるとき、お父様が「正直だけでは駄目よ。居留守を使うことも必要よ！」とおっしゃった。それは「政治力が必要ということですか？」とお伺いすると「生活力よ！腹を持て！」とおっしゃいました。その時以来、「政治とは生活である」こと、預言者（学者）的正直者の性向がある小生は、自らの長所と共に短所を自覚し、理想と現実との妥協点を探り、結果を出すことに専念するようにしている。

　叡智を結集して「10年後のナショナルゴールプロジェクト」に挑戦したいた時である。

その中間報告をアボジに申し上げると即座に「日本の国際化とはキリスト教化である」と思いがけない返事をいただいた。かつてご来日当初、日本は国家の枠から出ようとしない日本人に「富士山を逆さにしなければならない」と説教されたことがあったが、その後の島嶼国家連合の創設言い、雑居文明圏からキリスト教文明圏に引き開けようと苦労された。

　ハドソン川の釣りから帰られたアボジは、私の到着を待っていましたと言わんばかりに堰を切ったように話しだされた。「教授たちを如何に命の道に短縮して導くか！これが最も重要だ！」アボジの長年に渡る人材と経済の投入の本音に触れた感じがした。

　松下正寿先生の「救世主現る ！」の本をお届けした時である。翌朝アボジは「先生、昨夜徹夜して読んだよ！」とおっしゃった。

　那須聖先生の「牢獄のメシア」もそであるがアボジは自分がどのように知識人にお評価されているか、尋常ならざる関心を寄せていらっしゃることに気が付いた。

　80年代前後、アボジは陸から海にその関心の範囲を開拓された。世界の指導者層の食口を順次アメリカに呼んでは海洋訓練をされた。ボストンでのことであった。静けさ漂う海に突然マグロがかかった。アボジの船の目のまであった。アボジの「モリを打て！」

との声が聞こえる。その瞬間を逃してしまった。慌てた同僚はロープを船のデッキに巻き付けたらツナは太いロープを引きちぎって逃げてしまった。夜の反省会、皆の感想を聞き終えるとアボジは「逃がした時の悔しさ、生涯忘れない思い出になるであろう、悔しさを

バネに頑張るだね!」と慰労してくださった。そこには漁師であったペトロに「人を網する漁師にしてあげよう！」のイエスの言葉に通じる海洋訓練があった。アボジの船に乗ったことが何度かかった。アボジは小生を向き合いながら、海の詩的な世界を語られた。

朝もやのかかった海、午後の海はクジラが塩を吹く。「あの抜けるように青い空は神様の慰安の色なのだ。がかっかであったら人類の大半が気違いになるだろう」とも言われた。また朴大統領が腹心のKCIA長官に暗殺された当時、話が政治情勢にも及び「イエスは奇跡に頼りすぎたから十字架に追いこまれた」とか鬼気迫るお話をされた。

アカデミーを担当していた当初その報告は定期的に各部門の担当者のレポート、出版物、資料、写真集ともにお届けした。アボジの傍で秘書役さている先生が、「お父様は尾脇さん報告が届くと何をさておいてもそれを読めとおっしゃり、じっとお聴きなっていつも喜んでいらっしゃいました。」とお伺いし、侍義の時代、少しでも忠孝を尽くせたことを感謝いたします。報告書は筆書きであったのでそのコピーは散在してしまったがそのうちのいくつか母が書庫に保存しておいてくれていたので、後世への遺物として、それを打ち込んでいます。

松山貢三さん（８３歳）が信仰の支えにしているみ言葉がある。「６千年の歴史は失敗の繰り返しをして来たが、その原因は、全て『カインとアベルが一つになれなかった』ことにある。　カインとアベルが一つになると神が働き、カインとアベルが分裂すると、サタンが進入する。

もし、カインとアペルがお互いに少しでも不信感を持ち、わだかまりを持って心が離れる」「その僅かな隙間にサタンが侵入し、相手を否定し、批判し、対立し、分裂して、その結果、カインもアベルも、両方ともサタンに奪われてしまう。　だから、カインとアベルは協力して

一つにならなくてはいけない。」「カインとアベルが一つになるには、先ず、どちらが正しいか？どちらが間違っているか？と言うことを後回しにする事が大事だ。　お互いに、自分達の方が正しいと主張して善悪の問題を先行すると一つになれない。だから、そのことは

後回しにして、先ず、兄弟として愛し合うことが一番大切なことであり、愛すれば心が通じる。心が通じれば神様を中心として良く話し合える。良く話し合えば理解し合って一つになれる。」　このみ言を小生も骨身に沁みて痛感する。小生の失敗談をお話する。

　国を動かすには国家的アベルとカインが1つになるならなくてはならない。アカデミーを担当していた当時、小生の足りなささもあって11年務めたアカデミーを一時離れ渡米することになった長年お世話になった先生方が歓送会を開いてくださり、全国から激励のメッセージを頂いた。渡米の機上、激励のメッセージを読んでいると、どのからこんなに涙があふれでるのか機上中涙が止まらない。小生はただ夢中で奉仕をしただけであるがこんなにも小生のことを心にかけてくださっていたのかと感謝の念がこみ上げて来た。

　イーストガーデンでご挨拶をすると「その歓送会に寄せられたメッセージを読め」とおっしゃるので読み始めた。何十人もメッセージで途中ちらっと見るとアボジは腕組みをした手を頭にやりながらじっと聞いていらっしゃる。小生が読み終わった後、「感慨無量だろうね！」と一言おっしゃった。ドクター石の下、カープの指導の1年後の8月末、当然苑に言わせた4人（李戴錫、崔容碩、金奉泰、尾脇）に統一神学校へ行くように命令された。

「資格を取っておく将来役立つよ！」とおっしゃった。4年間の米国滞在、いまおもえば、帰国のご挨拶をして帰るべきであったと悔やまれてならない。早稲田を中退したため、3年分の単位をUTSに通いながら他の大学へも通ったり、試験を受けねばならなかった。この時しかないとUTSのDivinityコースに加え博士論文にも挑戦したため大幅に日本への帰国が遅れたのであっせってしまった結果の失敗である。

　日本に帰るとアボジは再びアカデミーに人事された。小生の帰りを待てくださっていた先生方と大いに働いた、1990年4月モスクワでの言論人会議には磯村NHK主幹を始め、読売日経、朝日、産経、共同通信等の論説委員クラスが参加した。

　プライバシーに関わるので詳細は差し控えるが、アボジが期待されたのはアカデミーの国家的カインとの一体化であった。小生の配慮の足りなさもあってサタンのつけ入る隙をあたえてしまい、アボジの願いを果たすことが出来なかった。小生を通しての期待が大きいほどまた、怒りも激しい。その後韓国、米国、南米、いずこにあってもアボジは小生の顔を見るなり雷が落ちた。ある時は「お前は乞食になる」と審判のことばが下った。その後小生は乞食のような境遇にあってもアボジの苦難の生涯から見れば何でみないと思っている。ただ家内を始め子供達や親族には多大な負担をかけたことを申し訳なく思っている。

　1999年8月1日、南米ナベレキホテルに在られたアボジから国家メシア召集の命が下った。あまりにも急であったたまその時駆けつけることができたのは8名であった。お父様とお母様を入れて「11名だね！」と寂しそうに言われたその後からが大変であった。

「あんたたちは、いつまで先生を舐めているのだ、今度来なかった者は国家メシアのタイトルを剥奪する！」と大変な剣幕で雷が落ちた。その後続々国家メシアは到着し40日国家メシア修練会は1ヶ月間延長して開催された。カインの不信仰で3次に渡って失敗に終わりつつある再臨摂理を一代で完全蕩減するべく、2001年から2012年、120年を12年に圧縮し、アボジは一生一代の「大博打」を打とうと悲壮な決意をされていたので、師の心を知らない、いつまでたってもふがいない弟子たちに対して雷が落ちたのであった。

　アボジは何千人も居る中でも一番後ろの隅っこにいる食口を見出し、そこへ近づき話しかけられることがしばしばありました。20０６年2月の御聖誕祭、訓読会がどこで行われているか、わからず、遅れて入ったので一番後ろの方でした。　アボジは壇上からアボジ道路を造らせ、まさに脱兎のごとく駆け寄られ、「お前は生きていたのか？お父さんはお前が顔を見せないので、とっくに霊界に行ってしまったのかと思っていたよ！」と嬉しそうに小生の体を抱きしめ、頬をなぜ乍らおっしゃいました。今思えば、その後もっと顔を出すべきであった反省しています。アボジが命がけで国家復帰に賭けていらった12年間、全く外に向けて、「為に生きること」に専念し、アボジの天宙史を賭けた挑戦にお力に慣れなかったことを心より懺悔致します。

そこが小生の信仰の足りなさだったとお父様にお会いした50数年前の当初から、いつも大切な時を失い、悔いることばかりです。神様とは、アボジとは？「親の愛の一念、これが私だよ！」との1963年9月入神現象を体験した時のことが思い起こされます。

　先日、５つの大学を創設した８９歳のシンクタンク会長とお会いする機会があった。其の折、ゼロ戦線戦闘機製造責任者であったお父さんの「表裏の無い人間となるように」との言葉を守って世の中に苦言を呈してきたことを話された。そして自分はあの世に行ったら

一番会いたいのは父親である。「お父さん、お父さんがおっしゃった言いつけを守って立派に生きてきましたよ！」と言いたい。とおっしゃった。今現代文明が見失いつつある命の絆それは父子関係であることを痛感し感動した。まず自分を立て、親と対等であろうとする西欧文明の欠陥が露呈されている今日、本当の親孝行とはなにか、生涯身も持って父なる神様に侍り、ボジの忠孝の精神を見せたくださったアボジに習い、救国救世の先頭に立とうではありませんか！

２０１６年３月３日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　尾脇 準一郎 拝

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

**準一郎の追補：**

　アボジはよく日本の教会幹部に見学をさせられることがあった。馬山（蔚山？）の自動車部品組み立て工場でのことである。

工作機械が立ちならぶ自動車工場を見学させ、その日の夜、食事が終わった後、日本の幹部に工場見学の感想を聞かれた。小生の一人手前は櫻井設雄兄であった。いつのように櫻井兄は心情的な報告であったが、アボジは笑いながら「小学生の感想文にもありません。」とおっしゃった。小生は「機械は正直である。」と答えたら黙っていらっしゃった。アボジはNCR、機械の頭脳ロボットを見てほしかったことが後でわかった。

　アボジは長時間にわたるお仕事の合間に体をほぐすために、米国ではビリアードや卓球をおやりになる。ビリアードは到底相手になりませんが卓球ではお相手をしたことがある。お父様に一度だけ勝ったことがある。それは韓国の青坡洞の旧教会でのこと。

その日午前中からアボジは祝福の件で午前中からお話をさいていた。日本の幹部たちはお父様のお話を終わるまで教会の裏庭にある卓球台で試合をやっていた。夕方ごろ、アボジは卓球台の所にお出でになり、卓球を軽く始められた。我々は午前中から練習をやっており、

リズムに乗っていたので、たまたま勝ったわけである。アボジは「もう一度」と言われ、今度は負けてまいった。独特のフォームから良く球をコントロールされるのには感心した。（写真はお母様、池先生、金栄輝先生の姿も見える。）

　アボジの教会幹部に対する批評は手厳しい。イーストガーデン伝出来事、ある先輩の幹部達には「白豚、イタチ、尼僧のようだ」と言われていた。小生は台風が来て必死に木にしがみ付いている猿と批評された。また漢南洞では、笑っても口元はシニカルで心から笑いなさいと始動された。また小生の行儀が良くないのを時折注されるたが、「お父さんが早く亡くなったので、お母さんも忙しくて教えられなかったのであろう」と同情もしてくださった。

国家復帰に完全投入されたアボジの晩年、バハマ復帰の使命を果たすことができなった。小生は懺悔の意味でアボジの2周忌に懺悔録を書いた。

（http://mnet.upf.cc/Bahamas/missionary.html）

**家内のぜひ付け加えたいこと：**

　1973年冬、オハイオ州で周藤先生を団長にIOWCの伝道をしていた折である。Ms. 沈徐姓（Hsu Dung Bok）を伝道した。1954年教会草創期、お姉さんと2人で入教した彼女は、その後米国へ留学。卒業後、中国人と結婚してオハイオに住んでいらっしゃった。36家庭に当然選ばれるような古いメンバーで、ご報告すると沈さんのお話をするとお父様は大変喜ばれた。Ms. Hsuはその後、中国人の夫と離婚、36家庭の池先生のお世話で80歳の黒人牧師と再婚、ボストンに住んでいらっしゃる。御嬢さんはブリッジポート大の経理を担当、夫は佐々木さんである。

　1976年秋、ワシントン大会が終わった後のことである。イーストガーデンでリーダーの中心とした朝食会が行われていた。日本に帰りたくないとの私の声を聴かれて、主人ともどもイーストガーデンに呼ばれた。私は霊の子たちのことを考え、「アメリカに残りたい」との思いを押させることができず、涙を流していた。それをご覧になった真のお母様は涙を拭くようにと、自分のナプキンを渡してくださった。「そんなにアメリカの残りたいなら離婚させるぞ！」とまでアボジは言われた。傍にいらっしゃった崔元福先生が「夫は針、妻は糸ですよ。両方が協力してこそ布も縫えるのですよ！」と優しく助け舟をだしてくださった。お父様も「良い子が生まれるよ！」と励ましてくださり、「ハワイでも寄って帰りなさい」とお小遣いをくださった。後に私は真珠のネックレスを記念に買った。日本に帰国したのは、合同結婚式から丸7年目の10月のことであった。家庭を持つのが最も遅いカップルの１つであった。